特集 伸びゆく酒田港

●お問い合わせ／市商工港湾課港湾空港係 ☎26-5758

酒田港における機能が年々強化され、その利便性が向上しています。

港の変遷やリサイクルポートとしての姿、また再生可能エネルギーの取り組みなどの現状やにぎわい、今後の酒田港に期待されることなどを紹介します。

酒田港の変遷

酒田港は最上川の河口に発達した港で、古くから日本海沿岸や内陸河川交通の要衝として栄えてきました。

寛文12（1672）年、河村瑞賢による西廻り航路の開拓で酒田港は一層繁盛しました。その後、明治の文明開化とともに鉄道の敷設（ふせつ）は東北にも及び、海上交通では帆船から蒸気船への転換による大型化が図られ、最上川舟運と港の機能は一時衰退しました。

しかし昭和4（1929）年に酒田港が重要港湾に指定されてから状況は好転し、現在は国際貿易港として脚光を浴びています。

平成4（1992）年には、中国黒龍江省との新航路「東方水上シルクロード」が、平成7（1995）年には釜山港との定期コンテナ航路が開設されました。

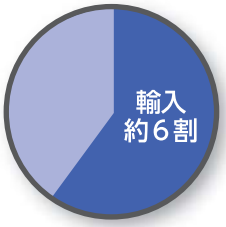
さらに平成12年7月からはコンテナクレーンやコンテナへ貨物の出し入れをする作業場（CFS上屋）を備えた国際ターミナルの供用が開始され、平成15年4月にはリサイクルポートの指定、平成22年8月の重点港湾選定、平成23年11月の日本海側拠点港のリサイクル部門での選定などを受け、新たな時代の港として躍進しています。

港の役割

日本はエネルギーの約9割、食料の約6割を海外に依存しており、私たちの生活に必要な原材料や製品は、ほとんどが船により運ばれています。これらの貨物を積み下ろしする場所が港です。

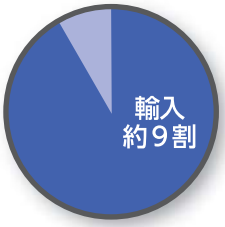
港は、私たちの生活と産業活動を支える重要な物流・生産基盤です。港には船が安全に停泊するための防波堤や貨物の積み降ろしのためのクレーン、検査などをする荷さばき施設・倉庫などがあります。また港の施設は津波などの災害から、人命・財産を防護する役割も果たしています。

食料品の海外依存率



出典：農林水産省
「食料需給表（平成21年度版）」

エネルギーの海外依存率



出典：資源エネルギー庁長官官房
総合政策課
「2008年度エネルギーバランス表」

港の機能強化

今年度、山形県が酒田港古湊ふ頭に貨物倉庫を建設しました。県の倉庫として初めて建物内に天井クレーンを設置したのが特徴です。

この倉庫の完成により、港においてより多くの貨物の保管と取り扱いが可能となり利便性が大幅に向上しました。

また倉庫の完成・運用に合わせて、高砂ふ頭にコンテナ荷役機械「リーチスタッカー」が配備されました。従来のフォークリフトタイプと比べ、前方の視界を確保できるなどの利点があります。

コンテナクレーン1基増設（予定）

さらに今年度中にコンテナを船から積み降ろしする装置であるコンテナクレーンを国際ターミナルに1基、新たに増設する予定となっており、より一層の港湾機能の強化が図られるものと期待されています。

平成25年4月 リーチスタッカーの供用開始

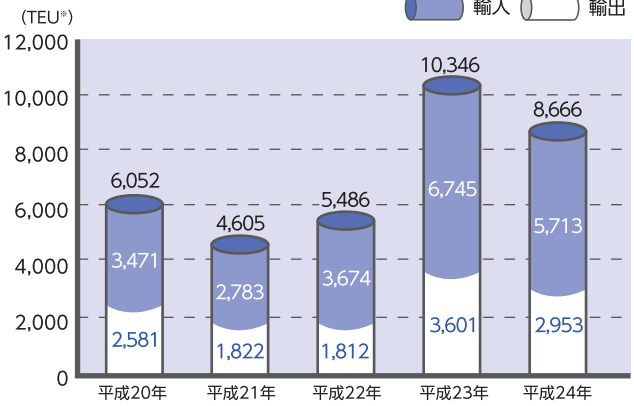
平成25年4月 古湊ふ頭倉庫の供用開始

●コンテナ貨物量

酒田港は東日本大震災後、太平洋側港湾の代替機能を果たし、取扱貨物量が増加しました。昨年は太平洋側港湾の復旧に伴い日本海側の貨物量が大幅に減少する中で、酒田港での取扱貨物量は若干の減少にとどまりました。

酒田港におけるコンテナ貨物量は、平成23年に輸出入合わせて過去最大の1万346個を記録しました。昨年は8千666個で前年より16・2パーセント減少したものの、過去2番目の取扱貨物量となっています。

コンテナ貨物の推移



※TEU/コンテナ（20フィート換算）の本数

リサイクルポートとして

平成15年の酒田港のリサイクルポート指定後、臨海工業団地にはリサイクル関連の企業の立地が進み、リサイクル関連貨物量が順調に増加してきていることから、酒田港はリサイクルポートの成功事例として大変注目されています。

平成23年には、循環型社会の到来、再生可能エネルギーへの本格的な取り組みの重要性、対岸諸国におけるリサイクル事業への支援の必要性などの社会的要請に応え、リサイクル貨物部門で唯一「日本海側拠点港」に選定されました。

また最近では、酒田FRC有限責任事業組合が酒田共同火力発電㈱より排出される石炭灰を再利用して作った砕石を福島県小名浜港へ輸送しています（本紙21ページの「おしごと拝見」を参照）。

再生可能エネルギー基地として

太陽光・風力・水力・地熱・バイオマスなどは、自然の活動によってエネルギー源が絶えず再生、供給され、地球環境への負荷が少ない再生可能エネルギーといわれています。

酒田港では広大な敷地を活用して、風力、太陽光などによる再生可能エネルギーを利用した発電にも取り組んでいます。

太陽光発電

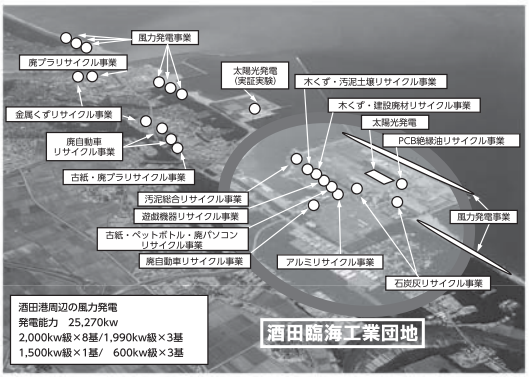
リサイクルポートのさらなる振興のために、㈱酒田港リサイクル産業センターでは酒田港北港地区の敷地1万7千平方メートルに年間発電量が120万キロワットの大規模太陽光発電施設（メガソーラー）を建設中です。この他、同社では国土交通省と環境省が連携して実施する「港湾の低炭素化を推進し、非常時にも電力供給を可能にするシステムの実証に関する事業」の委託を受け、国際ターミナル倉庫の天井に太陽光パネルを設置し、港湾施設への電力供給システムの実証実験を行っています。

風力発電

酒田港周辺は海風が強く、風力発電の適地とされています。このため15基の発電用風車が設置され、酒田港周辺における自然エネルギーの利活用が進んでいます。

酒田港周辺に立地した風力発電施設の能力は一般家庭での消費電力量約8千400世帯分に相当します。

酒田港周辺のリサイクル関連企業



エネルギーミュージアム構想を提案

株式会社酒田港リサイクル産業センター
代表取締役・特定非営利活動法人
庄内リサイクル産業情報センター理事
加賀谷 聡一氏

酒田港はリサイクルポート指定を契機として、環境関連産業の集積が進み、物流が活性化するなど、リサイクルの拠点港として循環型社会に貢献しています。

リサイクルポートで取り扱うリサイクル貨物は汚染性が低く資源性が高いものであり、さまざまな処理対策がされていることから環境保全にも万全です。

最近の酒田港は港湾管理者である山形県によって、コンテナクレーンや貨物を港に集積するための倉庫が完成し、さらに活性化の度合いを増してきています。

これに加えて酒田港では、全国に先駆けて酒田港の一部にさまざまな再生可能エネルギーを集積させて博物館や美術館のようにする「酒田港エネルギーミュージアム構想」を民間から港湾管理者に提案しています。酒田港にはすでに多くの風力発電施設、木質バイオマス混焼発電施設が操業していますが、今後、メガソーラーや災害時も使用できる太陽光発電、蓄電設備を使用した災害対応電源波力発電実証実験などの計画があり、構想が実現すれば「酒田港エネルギーミュージアム」として次世代の環境教育や低炭素型社会づくりにも大きく貢献できそうです。

港のにぎわいの創出

みなとオアシス酒田

平成17年には国土交通省より、酒田港本港地区周辺が東北地方では初めて「みなとオアシス」に認定されました。みなとオアシス酒田には、海洋センター、海鮮市場、みなと市場、日和山公園などが含まれ、そこでは各種のイベントが開催されたり、地場産品の販売や観光情報の提供が行われたりするなど、憩いの場、また親水空間として、多くの方々に利用されています。

●みなとオアシスまつり

みなとオアシス酒田のにぎわい創出や、認知度向上を目的に「みなとオアシスまつり」を毎年1回開催しています。

このまつりは、みなと市場や海洋センターの交流スペースなどを会場として、国土交通省港湾業務艇による酒田港の港内見学や働く船の一般公開、物産販売、海の生き物タッチプール、魚型丸太釣り競争などのイベントを開催し、多くの来場者に喜ばれています。

▲みなとオアシスまつり会場風景

▲海の生き物タッチプール

▲魚型丸太釣り競争

酒田港のにぎわいに期待

特定非営利活動法人
酒田港女みなと会議
理事長
小山 惠子氏

昭和の酒田を知る者にとって、映画館や休日の中町のにぎわいは語り草ですが、今年の酒田まつりで、その記憶がよみがえりました。昔の花火大会は本港で行われていて、旦那衆が乗る屋形船での芸妓の舞や三味線の音を想い出します。大人になればあの場所に行けると望んでいましたが、それは叶いませんでした。昔のにぎわいを取り戻すと一口に言いますが、それは昔に帰る事ではありません。時代も人の数もニーズも違うのです。前に進むしかありません。

現代はインターネットで、家を出なくても世界中を旅することができます。しかし映像と音は伝わりますが、人間の五感を揺るがす風の気配、熱さ、匂いや味、触感は得られませんし、まして地域の人と共有する楽しさは伝わりません。

酒田港女みなと会議では、港に人を呼ぶためのキーポイントに「味覚」をあげました。味と匂いは記憶に残ります。また美しい景色は忘れても、人の優しさは忘れません。同会議が港のにぎわいを企画し進化し続け、気になる存在として、これからも港に行かなければと思い立たせる仕掛けを作っていきたいものです。

豪華客船寄港

酒田港古湊ふ頭には多くの豪華客船が寄港しています。5月に「ふじ丸」が日本一周クルーズで酒田港に寄港しました。また9月には「飛鳥Ⅱ」や「にっぽん丸」の酒田港寄港が予定されています。豪華客船の寄港は多くの観光客が下船することから、観光振興にも貢献しています。

▲豪華客船入港
「飛鳥Ⅱ」(左)と「ぱしふぃっくびいなす」
(平成18年9月)

酒田港は本市や本県の産業・経済に直結する重要なインフラ(社会基盤)です。港の機能が強化されることによる貨物量の増加と、リサイクルポートや再生可能エネルギー施設などの整備により、さらなる活性化が期待されます。今後も企業などに対して、こうした港の魅力をPRしていきます。